

## 記憶のおもちゃ箱

高校の頃、八王子の西側に住んでいた私は、  
八王子の東側にある高校にママチャリで通っていた。

一年のときにクラスメイトに誘われて入った美術部には、  
卒業まで、ほとんど顔を出すことはなかった。

小さい頃から絵を褒められるのが嬉しくて絵が好きになった。  
でも、年を経ると「褒められる」ことよりも、  
成績のほうが価値が高く思うようになっていく。

美術部に入ったものの美術の知識や技術に長けた同級生の中で、  
なんとなく気後れして、自分にはそれほど才能がないのかも、  
と、思っていた。

一度だけ、美術の授業で鉛筆で静物画を描いたときに、  
いつもならそこでやめてしまうような完成度から、  
更に描き込んでみたところ、先生に高く評価してもらった。  
いつも諦めてしまうところの更に先に、  
それまで自分がかめなかったものがあるのかも知れない、  
と、おぼろげながら感じていた。

結局、美術と関わったのはそこまでで、  
大学を卒業して会社員となり、なんとなく出世して、  
中間管理職になって、40代なかばで体調を崩し半年間休職する。

かねてから時間ができたら絵を描きたいと思っていたので、  
ケント紙とペンを買って、描き始めた。  
体調を崩していたこともあり、  
幼少からの自分の好きなものを描いていこうと、  
記憶の中のおもちゃ箱をひっくり返してみた。  
そして、できたのが「カエル工場」の絵だった。

40年以上前の自分に会えたら、伝えたい。

君がママチャリで通っていた通りに、  
将来現代アートギャラリーができて、  
いま諦めている絵を描くことが、  
君を救ってくれるんだよ。

でも、高校生の僕は、「なにそれ」と言って、  
ママチャリを加速させていくだろう。